

# 平和学習「いしぶみ」の進化と発展

神部 秀一・中里 真一

Ishibumi-Studying for Peace : Evolution and Development

Shuichi Kambe and Shinichi Nakasato

## 要 旨

独自の素材を教材化し、子どもも教師も満足感の得られるような授業を創るにはどうしたらよいか。本稿は、昭和44年（1969）に広島テレビ放送が制作した「碑」という番組の授業化を企図し、3年間にわたって授業改善を繰り返した実践の記録である。テレビ番組を視聴させる「いしぶみ（2009）」から、朗読と語りによる「いしぶみ（2010）」、さらに90分枠の特別授業「いしぶみ（2011）」の授業まで、その進化と発展の経緯を詳細に述べている。授業改善を積み重ねて、一つの授業を精緻化していく過程を授業の「進化」と表現し、新資料を加えて90分枠の授業へと広げたものを授業の「発展」と表現している。授業の進化と発展に必要なことは、①長い時間をかけて実践するのに相応しいテーマであること、②取材と資料の作成を徹底して行うこと、③学習者の感想を生かして教師の話を具体的・説得的にすること、④協力が存在すること、⑤「完成形の授業」を目指して、意図的に繰り返し実施すること、としている。

キーワード：『いしぶみ』、平和学習、ヒロシマ新聞、りんごのほっぺ、授業改善

## 1. はじめに

筆者の一人である神部は、『いしぶみ-広島二中一年生全滅の記録-』（1970、以下『いしぶみ』<sup>(1)</sup>）の朗読と語りを中心とした授業を群馬県公立中学校教員だった2009年から始めて、東京未来大学教員の現在まで毎年実施している。授業の精度を高めながら毎年実施していこうと決めて、昨年（2016年）までに44回を数える。今年も夏が来ると実施する予定である。授業の実施回数を数えているというところに、授業への取組み姿勢が見て取れよう。

多くの教師は、自分が大切にしている独自の授業をもっていると思う。こうした授業は、子どもの反応に手応えを感じる。教師としての充実感・満足感を感じる。満足感が得られる授業だから繰り返し実

施する。この繰り返しの中で、授業は洗練されてますます安定的に満足感が得られる授業となる。こうして、いわば「宝物の授業」というべき授業が出来る上がる。

このレベルの授業を、「完成形の授業」と呼ぶことにする。そして、完成形に至るまでの追究過程を授業の「進化」と呼ぶことにしたい。もちろん完成形といえども授業はその後も繰り返されるわけであり、当然その度に変容することになる。本稿では、授業者の実感として一定水準に到達したと感じる授業を、一応の完成形の授業と考えることにする。完成形の授業の感触を手に入れると、それが基準となって普段の自分の授業を判断出来るようになる。このことは授業の質の保障に関わって重要である。

授業改善といわず「進化」と表現したのは、同じ

一つの授業、つまり同じ主題・内容・教材で行う授業の質的な向上を、数年にわたる期間で捉えようと考えているからである。授業改善の積み重ねともいえるが、通常、授業改善というときは、必ずしも同じ主題・内容・教材の授業を繰り返すことを前提としない。別の授業での改善も視野に入れる。長期で改善していくということも普通はしない。したがって、ここでいう進化は、限定した意味での授業改善である。一つの授業が変容しながら質的に向上していく過程、授業の精度が高まる精緻化の過程といってもよい。また、部分的に教材や資料を入れ替えたり、授業構造を変えたりして授業の「発展」を試みることもある。「進化」「発展」は、われわれの大事にしている独自の授業が、完成形に向かうことを考えている。

本稿は、次の2つのことを明らかにしようと試みる。すなわち、第1に2009年から2011年の3年間にわたる平和学習「いしぶみ」の進化・発展の過程を段階を追って、授業方法の視点から紹介することである。この3年間に限定したのは、最初の3年間で現在実施している「いしぶみ」が一応の完成をみたからである。そして第2に、そもそも授業の進化・発展とはいかなることか、進化・発展を保障するにはどうすればよいか、ある程度明瞭に説明することである。

われわれは、「いしぶみ」の授業を、2009年から2011年にかけて、3年間で通計18回実施した。中心資料『いしぶみ』との出会いから、進化の節目となった授業、つまり①完成形に進化させようと決意した「いしぶみ(2009)」、②資料を準備して飛躍的に進化させ完成形の感触をもった「いしぶみ(2010)」を経て、③90分枠の特別授業へと発展させた「いしぶみ(2011)」の実施まで、「いしぶみ」の進化・発展の経緯を詳述する。そして、われわれが授業の進化を保障する条件と感じたこと、すなわち、長期間の実践・追究に耐え得るテーマであること、興味・関心を誘う素材であること、準備を徹底して行うこと、学習者の感想の中に授業を進化させるヒントがあること、などを示すこととする。

## 2. 「いしぶみ(2010)」への準備

### (1) 『いしぶみ』との出会い

『いしぶみ』は、昭和44年(1969)、広島テレビ放送制作のテレビ番組「碑」の草稿をもとにして書かれた本である。

昭和44年に広島テレビ放送が、昭和20年(1945)8月6日に被爆した広島二中一年生一人ひとりの遺族に対し、生徒の被爆状況に関する調査を行った。その結果判明した226人の生徒個々の死に至る経緯を、文学座の杉村春子氏が静かに語るという番組であった。

かつて、神部が初めてこの番組を見たとき強い衝撃を受けた。原爆で20数万人が死んだと聞くよりも、一人ひとりの具体的な姿が語られることの方がよほど原爆の恐ろしさを伝えていると感じた。同時に「朗読と語り」の力を感じた。杉村氏の朗読は、一発の原子爆弾で生徒やその家族にどんなことが起こったのかを具体的に想像させ、翻って平和の尊さを実感させていた。惨劇の写真を見せなくても、朗読と語りによって深く心に刻めることを知った。これはいつか授業で取り上げたい内容だと思っていたところ、2009年8月上旬、偶然古書店で本書『いしぶみ』を見つけた。この出会いが、われわれを平和学習「いしぶみ」へと導くことになった。

### (2) 広島テレビ放送からビデオ「碑」を入手

「いしぶみ」の授業化を決意して、改めてテレビ番組「碑」を見ておきたいと考え、2009年8月下旬、神部は広島テレビ放送に連絡を入れた。すると、「碑」は現在も広島テレビ放送の財産としてコンテンツ事業局に保管されていることが分かった。そこで、ビデオ「碑」をお借りし、このビデオで平和学習を実施することにした。

### (3) 「いしぶみ(2009)」の実践

2009年2学期、神部が勤務している群馬県太田市A中学校1年生及び3年生に上記のビデオを基に平和学習「いしぶみ(2009)」(道徳：平和を求める日本人になろう)を実施した。

1945年当時の広島状況と広島二中一年生の疎

開作業の様子を説明した後、ビデオを視聴させ、感想を求めた。生徒は異口同音に「核兵器の恐ろしさ、平和の尊さ、語り継ぐことの大切さ」について感想を書いた。また「今、心の中にあるのは、ものすごく大きなショックだけです」と書いた生徒もいた。多くの生徒が、平和学習のねらいを心から受け止めていると思った。同時に、この「碑」という素材が第一級の資料であり、今後時間をかけて進化させるに相応しい価値ある教材だと実感した。昭和44年のビデオ映像「碑」に頼っているのは、「完成形の授業」とは言い難い。教師自らが語り部となる「いしぶみ」にすることが、完成形と呼べる授業への第一歩であると考えた。

#### (4) 広島テレビ放送の山田圭子氏の指摘

お借りしたビデオに礼状を付けてコンテンツ事業局へ返却したところ、担当の山田圭子氏より返信を頂戴した。その中に、広島の抱える現在の問題が書かれていた。

——地元の子供たちでさえ「8月6日」を認識できないことが問題化して、小学校では登校日にして、語り部の方のお話を聞いたりする取り組みもされています。

「風化」というのは恐ろしいことです。「風化」させない為に、私たちに何が出来るのか？ 日々突きつけられる課題です。——

山田氏の指摘によって「風化の問題」に気付かされた。戦争の悲惨さを知ることが平和の尊さを知ることであると考えていたが、それだけでは不十分であった。「風化の問題」は、現在の平和学習に欠かせない指導内容だと気付いた。

この段階で第2次平和学習「いしぶみ(2010)」は、①教師の朗読による『いしぶみ』の紹介、②風化の問題、という内容の大枠を決定した。

#### (5) 「いしぶみ(2010)」に向けての準備

平和学習に関して、教師が期待するほど生徒は初めから興味や問題意識をもっている訳ではない。「いしぶみ(2010)」は、教師の朗読を中心に据えるが、われわれの経験上、生徒の集中力は、保って20分であろう。そこで、朗読の合間にスライドを見せたり「ヒ

ロシマ」の地図を用意して説明したりするなどの工夫が要ると考えた。具体物・視覚資料で生徒の興味・関心・集中力を持続させるべく、以下の準備を行った。

#### ①資料の収集

2010年1月初旬及び2月下旬に、神部は広島の平和記念公園にある広島二中の「慰霊碑」を訪ねた。慰霊碑の裏面には広島二中一年生全員の氏名が彫られている。その中から、授業で紹介する予定の生徒名を捜して写真を撮った。また、この取材旅行で、広島市南部の詳細図(768mm×1081mm)、25000分の1の地形図、平和記念資料館で1945年7月25日と8月8日の爆心地の航空写真(『地図中心』<sup>(2)</sup>)を入手した。

#### ②共同研究者中里による資料の作成

2010年4月、太田市B中学校に異動した神部は、「いしぶみ(2010)」の授業構想を、同校に大学院研修でスクールサポート<sub>(注1)</sub>として派遣されていた中里に伝えた。中里は「いしぶみ(2010)」の資料作成を全面的に担当し、掲示用「ヒロシマの地図」(模造紙)及び地名のマグネット(図1)、「河本君の日記」(『いしぶみ』から河本幸美君の日記の打ち直し)、掲示用「爆心地の航空写真(原爆投下直前・直後)」(『地図中心』より)、説明用「スライド」、「ヒロシマ新聞」(中国新聞社)と、次々に準備していった。「ヒロシマ新聞」は、中国新聞労働組合が1995年8月6日に発行した特集新聞である。発行日付は、1945年(昭和20年)8月7日(火曜日)となっている。これは、「原爆が投下された翌日に、もし新聞が発行されていたとしたら」という考えに基づいて制作されたものである。中里が「ヒロシマの地図」を作成中にインターネットで偶然この新聞を発見したのである。「ヒロシマ新聞」は、風化防止の取り組みの一つとして生徒に紹介できると考えた。

その気になって資料を探すと次々に資料を見つけ出すことが出来た。こうした資料収集や資料作成の過程で、われわれの授業への思いはますます高まっていた。



### 3. 「いしぶみ (2010)」の実践

#### (1) 事前調査と結果

「いしぶみ (2010)」の授業実施前に1年生の1クラス (28名) で実態調査を行った。質問内容と5段階評定の平均値は次の通りである。

「戦争とか平和とか考える (3.5)」、「太平洋戦争 (第二次世界大戦) について知っている (3.1)」、「原爆 (原子爆弾) について知っている (3.5)」、「広島に原爆が落とされたことを知っている (4.5)」、「広島の前爆でどのくらいの人が亡くなったか知っている (2.6)」、「平和な世の中を実感している (3.6)」。

「広島に原爆が落とされたことを知っている (4.5)」以外は、それほど高い数値ではないことが分かった。生徒の知識や問題意識は、それほど高くないということであろう。そこで、ある程度、太平洋戦争のことや、当時の広島の様子を知識として与えながら授業を進める必要があると感じた。

#### (2) 「いしぶみ (2010)」の構想と実施

2010年5月31日から6月8日にかけて、1年生3クラス (A・B・C組) で第2次平和学習「いしぶみ (2010)」を実施した。「平和を求める日本人になろう」(道徳)をねらいとし全1時間で行った。内容は、「原爆の悲惨さ」「風化の問題」である。以下に授業の展開に沿って指導の意図を詳述する。

##### ①原爆の悲惨さを具体的に知る段階 (前半35分)

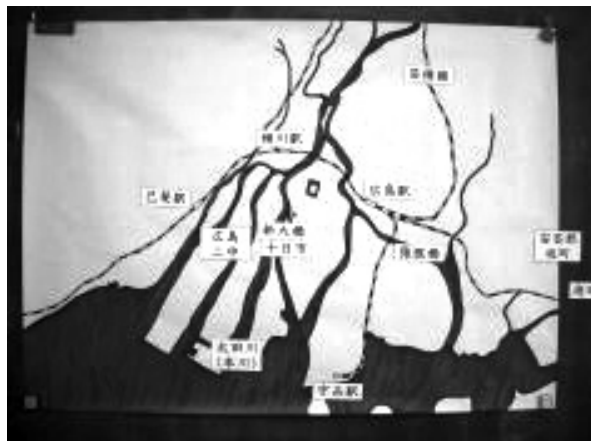
※ ( ) の数字は、予定時間を示す。

##### (ア) 授業の導入:「河本君の日記」(5分)

広島二中一年生に家族がいること、普通の生活があったことを確認しておくことが、この後の被爆の悲惨さを強調することになると考えて、日常生活が記録されている河本君の日記を取り上げる。また、本時は、教師による語りが大半を占める。そこで、日記を何人かに読ませて生徒の発言・発表の機会を保障する。

##### (イ) 原爆投下前・後のヒロシマの写真 (5分)

当時の広島の様子が具体的に分かるように「ヒロシマの地図」(図1)、「航空写真 (原爆投下直前・直後)」を掲示する。8月6日の疎開作業・爆心地



【図1 掲示用「ヒロシマの地図」】

について説明する。8月8日の投下直後の写真から、被害の程度を実感させる。この段階では、ヒロシマの惨状は理解できても、生徒にとってはまだ他人事だと予想される。

##### (ウ) 『いしぶみ』の朗読と語り (18分)

この朗読と語り、生徒に原爆の恐ろしさ、平和の尊さを実感させることになると考える。『いしぶみ』から、広島二中一年生のエピソードを拾って被爆の様子を朗読し、語る。爆発前・爆発時・爆発後の二中一年生の姿を個々に具体的に語ることで、生徒の心情に迫れると考える。興味を持続させるために、語りの途中で慰霊碑や生徒の名前を刻んだ碑のスライドを提示する。朗読後に、原爆による死亡者20数万人という数を知らせ、太田市の人口以上が亡くなっていることに気付かせていく。この後、8月9日に長崎に原爆が投下され、15日に敗戦となることを説明し、朗読と語りを終了する。

##### (エ) 感想の発表 (7分)

知識を整理し考えを深めるために感想を書かせる。「原爆の恐ろしさ・悲惨さ」は必ず感想の中に出てくると思われる。机間巡視をして「家族の悲しみ」「平和の尊さ」について書いた生徒を意図的に指名する。様々な視点の発表を聴かせて考えを広げるようにさせる。

##### ②風化の問題を考える段階 (後半15分)

##### (オ) 風化の問題 (8分)

前述したように、生徒に原爆の悲惨さを実感させるだけでは不十分である。そういう授業は沢山ある

う。本授業の特徴は「風化の問題」を取り上げるところにある。「風化」を扱うことで、自分に何が出来るかということ具体的を考えさせ、戦争と平和を自分に関わる問題として捉えさせる。広島テレビ放送の山田氏の手紙及び「ヒロシマ新聞」を紹介して、風化の問題に気付かせる。また、慰霊碑をお参りする広島二中関係者のスライド、中国新聞社のWebページから広島二中生死者リストを紹介し、悲しみが今も続いていること、検索が続いていることを知らせ、風化について考えを深めさせる。

(カ) 授業の感想発表 (7分)

この授業をどのように受け止めたか、「風化」についてどんなことを考えたか書かせる。

以上のように、「原爆」についての知識を与えながら心情に訴え、さらに「風化」について考えさせることで、自分も出来ることをしなければ、という行動を促すような授業になるよう構想した。

(3) 「いしぶみ (2010)」授業の結果

当然のことながら、「完成形の授業」は学習者も満足させていなければならぬ。授業後に5件法(5=かなり当てはまる、4=まあまあ、3=少し、2=あまり当てはまらない、1=ぜんぜん)で、学習者の受け止め方を確認した。その結果が表1である。実践は1学年3クラスで同様に行ったため、表中の数値は3クラスの合算である。

どの項目においても、5の「かなり当てはまる」や4の「まあまあ当てはまる」という肯定的評価が多く、とりわけ5と回答した人数が多いという印象

をもった。そこで、母比率1:4の直接確率計算を行った。5と回答した「非常に肯定的評価をした人数」と、4~1の回答数を合算した「それ以外の人数」との比較である。その結果、すべての項目において5の「非常に肯定的評価をした人数」が1%水準で有意に多かった。このことから、生徒の授業への取り組みは積極的であり、ねらいも高い水準で達成出来たことが認められた。「授業評価(授業全般についての5段階評価及び判断理由の記述)」の4.47という数値もかなり高い。授業中、生徒の食い付きのよさを感じたが、それが数値で確かめられたといえる。B組を参観した太田市指導主事からも「私も心が動かされました。一斉授業の形式の究極の姿」という評価をいただいた。「いしぶみ(2010)」は、一応の「完成形の授業」という感触をもつことができた。

一方、項目2「感じたり考えたりしたことを書く」については、2割を超える生徒が3以下の回答であった。平均値も他の項目より相対的に低い。項目7「風化の問題」についても、平均値が相対的に低かった。これらは、ワークシートに記述する時間が足りない、「風化の問題」にかける時間が短い、という理由ではないかと考えられた。授業者としても、もう少し時間が欲しかったという印象であった。

(4) 生徒の感想

表2に生徒の主な感想を掲げる。教師の朗読と語りが大変よく伝わったようだ。朗読と語りでいける、と確信するに足る感想だと感じた。

【表1 中学1年生の授業評価】

|   | 項目 (中学生3クラス80人の結果)     | 5  | 4  | 3  | 2 | 1 | 平均   | 直接確率 (母比率不等) |
|---|------------------------|----|----|----|---|---|------|--------------|
| 1 | 先生の話を中心して聞いた。          | 48 | 22 | 10 | 0 | 0 | 4.48 | 0.0000 **    |
| 2 | 感じたり考えたりしたことを書くことができた。 | 30 | 33 | 13 | 4 | 0 | 4.11 | 0.0002 **    |
| 3 | 戦争当時の中学生の様子がわかった。      | 54 | 21 | 14 | 1 | 0 | 4.60 | 0.0000 **    |
| 4 | 1945年当時の広島の様子がわかった。    | 49 | 23 | 7  | 1 | 0 | 4.50 | 0.0000 **    |
| 5 | 被爆時の状況がわかった。           | 53 | 20 | 6  | 1 | 0 | 4.56 | 0.0000 **    |
| 6 | 広島二中生の被爆の様子がわかった。      | 47 | 21 | 9  | 2 | 1 | 4.39 | 0.0000 **    |
| 7 | 風化の問題がわかった。            | 39 | 27 | 11 | 3 | 0 | 4.28 | 0.0002 **    |
| 8 | 平和について考えられた。           | 43 | 26 | 10 | 0 | 1 | 4.38 | 0.0000 **    |
|   | 授業評価                   | 50 | 18 | 10 | 1 | 1 | 4.47 | 0.0000 **    |

(※5と4以下とに分け、母比率不等の直接確率計算を行った。 \*\* p<.01)

【表2 生徒の感想（一部）】

- ①原爆の悲惨さを具体的に知る  
 ○先生が本を読んでいるのを聞いて、泣きそうになった。こんなにひどいことはないと思った。太田市と同じくらいの数の人達が、原爆一つで死んだと聞いてびっくりした。  
 ○一人ひとり、名前、顔、人生があるのにそれがはっきりと分からない人がいて、すごく悲しい。  
 ○今まで原爆のことはぜんぜん知らなかった。話を聞いて、親に会えずに亡くなっていった人たちの悲しみを感じた。  
 ○数字にして死者数を表すのは簡単だけど、一人一人の気持ちを表すのは難しいと思う。生きていることが幸せ、昔と比べて、今の時代はすごく幸せなんだと思った。
- ②風化の問題を考える  
 ○確かに、もしテレビで原爆特集を見つけても、ほくだったら違う番組に回してしまうかもしれない。  
 ○ヒロシマのことを知らない人が増え続けたら、また、同じ苦しみを繰り返すことになると思う。戦争もまたやることになると思う。繰り返さないためには、生きている幸せと、戦争の恐ろしさを私たちが伝えていく必要があると思った。  
 ○風化のことについて、私も実は8月6日が何の日か、知りませんでした。でも、神部先生の話聞いて、それはとても失礼なことだと思いました。広島二中の生徒は、この日のことを知っていて欲しいと思う。  
 ○他の国の人は、私たち以上に知らないんだろうなと思いました。

### (5) 「いしぶみ (2010)」の大学生への実施

2010年7月14日、教員養成実地指導講師として群馬大学教育学部3年生を対象に「いしぶみ (2010)」を実施する機会を得た。1クラス約110人、2クラスで90分枠の「いしぶみ (2010)」を実施した。90分枠で実施すれば、6月の太田市B中学校1年生を

対象とした授業の課題、すなわち時間の保障の問題が解決するのではないかと考えた。

授業後、中学生と同様の内容・方法でアンケート調査を行った。結果を表3に示す。どの項目においても5や4の肯定的評価が多く、中学生と同様の結果だった。授業全般の評価も4.7と非常に高い。母比率1:4の直接確率計算の結果も、すべての項目において5と回答した「非常に肯定的評価をした人数」が1%水準で有意に多いことが認められた。したがって、大学生においても、ねらいが高水準で達成できたことが確認できた。中学生で低かった項目2・7は、大学生の平均値では、他の項目との差は感じられない。中学生と大学生とでは、発達の違いがあるため単純には比較できないため、念のため中学生と大学生の回答に差異があるかどうかを確認した。一要因分散分析（被験者間比較）を行った結果、項目2・6・7に1%水準で有意な差が認められた。中学生で低かった項目2・7で、大学生の方が肯定的回答をしていることが統計的に明らかになった。

以上の高評価の理由として、次の2点が考えられる。

○模擬授業形式で授業中に解説を加えていたので、学生の理解を一層深められたこと。

○90分枠なので書く時間を完全保障できたこと。

大学での授業を通して、「いしぶみ (2010)」の実施に必要な授業時間は、60分から65分という感触をもった。中学校一単位時間の50分に収めるためには朗読箇所を削る必要がある。しかし、削りに削って

【表3 大学生の授業評価】

|   | 項目 (大学生2クラス226人の結果)    | 5   | 4  | 3  | 2 | 1 | 平均   | 直接確率 (母比率不等) |
|---|------------------------|-----|----|----|---|---|------|--------------|
| 1 | 先生の話を中心して聞いた。          | 159 | 55 | 8  | 3 | 1 | 4.63 | 0.0000 **    |
| 2 | 感じたり考えたりしたことを書くことができた。 | 157 | 59 | 8  | 2 | 0 | 4.64 | 0.0002 **    |
| 3 | 戦争当時の中学生の様子がわかった。      | 158 | 57 | 10 | 0 | 1 | 4.64 | 0.0000 **    |
| 4 | 1945年当時の広島の様子がわかった。    | 110 | 85 | 26 | 3 | 2 | 4.32 | 0.0000 **    |
| 5 | 被爆時の状況がわかった。           | 146 | 63 | 15 | 1 | 1 | 4.56 | 0.0000 **    |
| 6 | 広島二中生の被爆の様子がわかった。      | 179 | 39 | 7  | 0 | 1 | 4.75 | 0.0000 **    |
| 7 | 風化の問題がわかった。            | 157 | 50 | 16 | 2 | 1 | 4.59 | 0.0002 **    |
| 8 | 平和について考えられた。           | 139 | 51 | 29 | 5 | 2 | 4.42 | 0.0000 **    |
|   | 授業評価                   | 167 | 54 | 2  | 2 | 1 | 4.70 | 0.0000 **    |

(※5と4以下とに分け、母比率不等の直接確率計算を行った。 \*\*  $p < .01$ )



残した朗読箇所である。これを更に削るとなると、朗読から受ける印象が薄くなってしまふ虞がある。中学生のための「いしぶみ (2010)」の時間の問題は依然未解決といえよう。

#### (6) 「授業の進化」のための大学生の感想

大学生の授業感想には、授業の進化に欠かせない貴重な内容があり、印象的な言葉があった。

大学生は「一人一人の死を具体的に語られる怖さ」というように内容を分析し、「親の慟哭」「人間の悪意」など、話題を広げている。また、「教師のポジション、授業だからこそできる」というような教師の立場からの感想も出た。そこで、大学生200余人の感想から、教師一人では考えつかないような言葉を拾い、繋げて、教師の語りを補完し説得的かつ精緻化していくこととした。表4のような言葉を授業で使わせてもらうことにした。

なお、次のような意見は、われわれに、片寄った見方にならぬよう戒めている。独善に陥らぬよう、広い知識をもって授業を組み立てるようにと受け取った。批判的感想からも学ぶことが多い。

——科学者の反対を聞かない米国軍部は、原爆を悪いものと思っていない可能性があると思う。そちらの立場の考え方も聞かないと、考え方が広

#### 【表4 大学生の感想から】

○戦争の話を書くのは怖い好きではないという無関心が風化を助長する。この場で嫌な気持ちになる、嫌な気持ちに向き合うことが大事。授業だからこそできるのである。

○いじめは、やった方は忘れてしまうが、やられた方の心の傷は消えないといわれる。原爆はどうだろうか。落とされた方は忘れていたろう。しかし、落とされた方は？ 落とされた日本人自身が忘れてしまっているのではないか。今の問題は、原爆を落とされた私達自身が忘れてしまっていることにあるのではなからうか。

○風化…。風と化す。何事もなかったかのように、通り過ぎていく風のように、意識されなくなってしまう。

○被爆国だからこそ、伝えていく意味がある。日本人にとって忘れてはならない日。それを教えるのは、教師。教師が強い意志をもって伝えていくことが重要。教師はそのことを伝えられる重要なポジションにいる。

○原爆ドームの前でピースサインをして写真を撮る学生がいる。戦争の痛み、原爆の知識をもっているのだろうか。

島よりで一方的になってしまう気がした。——

#### (7) 精緻化のための実践発表

「いしぶみ」は、朗読と語りを積み重ねる形式で展開される。教師の朗読と語りの精緻化と安定化は、「いしぶみ」を完成形の授業とするための重要な条件である。そのため機会を捉えて、例えば①東京国語教育探究の会 (2010.7)、②B中学校内研修公開模擬授業 (2010.8)、③群馬県総合教育センター初任者研修 (2010.9) などで、計7回の実践発表を行った。人前で発表することが朗読・語りの質を飛躍的に高めることを経験的に知っているからである。また、実践のたびに感想を書いてもらい、教師の立場から「いしぶみ」授業へのアドバイスを頂戴した。

次の意見は、直接朗読に反映させることが出来た。——「退避」「伏せろ」の朗読で、急に大きな声を出すと、ある種の生徒にはパニックを起こさせる危険性がある——

こうして、朗読と語りをいつでもどこでも合格点の出せるレベルまで向上させていった。

## 4. 「いしぶみ (2011)」の実践

### (1) 新資料「りんごのほっぺ」

中国新聞社のWebページに「遺影は語る～広島二中～」がある。広島二中生一人ひとりの顔写真と「氏名・住所・出身国民学校・被爆死状況等」が掲載されている。2000年6月28日が最終更新日で、「新たに確認できた死没者」として水永龍男君の名がある<sup>(注2)</sup>。

新資料「りんごのほっぺ」<sup>(3)</sup>は、女優渡辺美佐子氏のエッセーである。高校の国語教科書に掲載されている。この中に「水瀧君」という渡辺さんの初恋の人が登場する。この水瀧君こそ上記の水永龍男君である。われわれは、この資料を偶然発見した。

「いしぶみ (2011)」には、渡辺氏の資料を加えて、授業内容を構想することにした。というのも、「りんごのほっぺ」を読み継ぎ語り継ぐことは、水永君が生きていた証を保障することになる。水永君は、肉体の死は迎えても、われわれの記憶の中に永遠に生

きることになる。記憶にとどめることが、風化防止の手段となるからである。

また、「りんごのほっぺ」によって渡辺氏の経験を疑似的に体験することによって、生徒にとっては過去の話でしかなかった原爆の悲劇が、身近に感じられるのではないかと考えた。この疑似体験による具体性が、翻って「いのちの尊厳」「平和の尊さ」を実感できることにつながるのではないだろうか。過去との向き合い方、という視点を新たに投入したという言い方もできよう。

## (2) 「いしぶみ (2011)」の実施

「いしぶみ (2010)」は、一応の「完成形」の感触をもてた。しかし、時間不足の課題が残っていた。また、新資料「りんごのほっぺ」を扱いたいという思いもあった。そこで、第3次平和学習「いしぶみ (2011)」は、90分枠の特別授業とすることにした。

2011年、夏休み中の8月5日(金)、午後5時から授業を実施した。生徒は希望の参加とした。また、保護者や教員仲間に参加を呼びかけた。その結果、生徒3名、保護者1名、教員24名、計28名が「いしぶみ (2011)」に参加することになった。「いしぶみ (2011)」は、以下の方針で実施した。

①生徒・保護者から教師まで学習者の幅が広い。そこで、中学生に分かるよう「いしぶみ (2010)」の展開を基本とし、風化の問題で「りんごのほっぺ」を加える。

②授業後に、8月6日を迎えられるよう、原爆投下日の前日に授業を実施する。

③「いしぶみ (2010)」の学習者の感想から抽出した言葉を、教師の語りに使用する。

④「りんごのほっぺ」の朗読は、予めお願いした5人の先生方に読んでもらう。

## (3) 「いしぶみ (2011)」の感想

「いしぶみ (2011)」の感想は以下の通りである。「りんごのほっぺ」を投入したことで、「(水永君に)二度目の死を迎えさせないことが平和学習」「生きていた証を残すためにも語り継ぐ」などの感想を得て、風化防止の考え方が深まりをみせていると感じた。授業後に参加者から「来年も、8月5日にやります

よね」という感想も頂戴した。この特別授業は、授業者にとっても、大いに手応えがあったという印象をもった。

## 【表5 いしぶみ (2011) の感想】

### ①生徒の感想

○今日の話は2回目だけど、本当に戦争はこわいと思った。「ヒロシマ新聞」の、ドイツが原爆を作ろうとしたから対抗してアメリカも作ろうという考えではなく、ドイツをやめさせようと考えられれば、日本や世界はもっと違ってよくなっていたのでは、と思った。平和学習とは、今ある平和を大切にという意味だったのかなと思った。

○風化はおそろしいと思った。絶対戦争なんかしない、あんな思いはしたくない、と思っていたことが、年月をかけて忘れられてしまっただけで、私が大人になる頃、また戦争をしてしまうかもしれないからだ。今日の授業で、明日の8月6日が去年と違う日になるだろうと思った。

○特に強い印象を受ける言葉があった。「あとからでいいよ」「水が飲みたい」。せめてこの言葉やこの人たちの思った悲しみなどは、自分の中で風化させたくない。

### ②教師の感想

○平和学習への自分の認識ががらりと変わる授業だった。今まで平和学習として、ことさらに、悲惨さ、理不尽さを児童に実感させることが重要だと考えてきた。しかし、それは大きな誤りであった。あの日広島にいた一人一人の記憶を次の世代に伝えていくこと、二度目の死を迎えさせないことが平和学習だと思った。私もその活動のために出来ることをしていきたい。

○遺族にとっては、肉体の死はもちろん悲しいことです。ですが、記憶から消え去り、その人が生きていたという証すらあいまいになっていくのは本当に寂しいことです。生きていた証を残すためにも語り継ぐ必要があるのですね。

○話し合いがあるわけではなく何か活動があるわけでもない。しかし、目の前に突きつけられるようなメッセージを感じた。

○授業の構成が、最後、「ではあなたはどうか考えるのか」に迫られ、何か始めよう、何かできるはずと、行動に向かわせるような過程になっていた。課題を突きつけられた余韻の残る授業でした。

○私は戦争の知識が乏しいのに、何の学習も進めませんでした。それは、酷い光景を見たくないとか話を聞きたくないとか、自分勝手な理由だったのだと気づきました。戦争に真正面から向き合うことを避けてきました。今日の授業を受けて自分の気持ちを変えようと思います。

○「授業」という名でくくることのできない不思議な時間でした。死者というか私たちに未来を与えてくれた人たちが次々にメッセージを持ってあらわれるのではないかと思います。



○教員は伝える側にいる。伝えるべき子どもと常に接している教員はチャンスだと思った。教師は、学び続けて、自分自身が成長できる素晴らしい仕事だと改めて感じた。同時に教師としてもっと知らないといけないと思った。

○渡辺美佐子の文章が見つかったことで、授業の構成は作り替えられそうな予感がする。渡辺美佐子が出たテレビ番組を探せないだろうか。

○日本に投下された原爆についての見解は、日本人と他の国の人とはかなり違う。自分の立ち位置が違う。戦争の風化が進まないようにするために自国民が向き合えることは国によって違う。風化させないためには自国民の傷にも触れていかなければならないだろう。

## 5 まとめ

第1次「いしぶみ(2009)」で、「碑」が優れた平和教材であることを確認した。完成形の授業を目指そうという決意をさせる実践となった。第2次「いしぶみ(2010)」は、教師の朗読と語りを中心に、資料「河本君の日記」「ヒロシマの地図」「航空写真」を用意し、「風化の問題」を取り上げ、授業評価の高い実践となった。この「いしぶみ(2010)」は、とりあえずの「完成形の授業」といえる感触をもつことが出来た。そして90分枠へと発展させた第3次「いしぶみ(2011)」は、新資料「りんごのほっぺ」を加えて、授業者にも学習者にも満足いく内容の濃い実践となった。

ここで、現時点までのまとめを行う。3年間の「いしぶみ」の授業を通して確認した授業の進化を保障する条件を抽出する。

### (1) 進化を保障する5つの条件

- ①教師が、興味・関心をもつ素材であること。また、何年間かけて進化させるのに相応しいと思えるテーマであること。大きなテーマは、資料が豊富である。また、長期間、飽きが来ないで追究できる。
- ②徹底した取材と自作資料の作成を行うこと。納得がいくまで取材する。具体物を用意する。この作業の過程で授業に対する思い入れが強くなる。
- ③学習者の感想を生かすこと。感想の中に進化へのヒントがある。批判は改善に役立ち、学習者の珠玉の感想は次の授業に生かして、教師の話を具体的・説得的にする。

④協力者が存在すること。授業は神部が行い、資料作成、結果の分析は中里が分担した。「りんごのほっぺ」の朗読は、仲間の先生方が担当した。授業を見てくれる同僚やアドバイスをしてくれる方から、有形無形の支援が頂戴できる。

⑤授業を繰り返し実施すること。1回や2回の授業では、語りや朗読の質が保障されない。語りを説得的にする、朗読を安定的に行う、生徒の反応を確かめるなど、繰り返すことでだんだん授業が自分のものになってくる。自信もついてくる。そして、「完成形の授業」を目指す。この目標追求の姿勢がなければ、「完成形の授業」は創造できない。進化や発展はなく、新たな資料の発見もないだろう。50分から90分枠へという発展的授業もあり得なかったと考える。

### (2) 今後の「いしぶみ」への示唆

感想の中には必ず進化・発展へのヒントがある。第4次「いしぶみ」実践へのヒントとして、次の3つの感想が示唆に富んでいる。

(ア) 渡辺美佐子の文章が見つかったことで、授業の構成は作り替えられそうな予感がする。渡辺美佐子が出たテレビ番組を探せないだろうか。

(イ) 日本に投下された原爆についての見解は、日本人と他の国の人とはかなり違う。自分の立ち位置が違ふ。戦争の風化が進まないようにするために自国民が向き合えることは国によって違ふ。風化させないためには自国民の傷にも触れていかなければならないだろう。

(ウ) 科学者の反対を聞かない米国軍部は、原爆を悪いものと思っていない可能性があると思う。そちらの立場の考え方も聞かないと、考え方が広島よりで一方的になってしまう気がした。

(ア)の感想をヒントに、次のような展開も構想できそうだ。現在の内容「原爆の悲惨さと風化問題」を2つに分けて再構成し、2時間かけて創る。中1で「いしぶみ」、中2で「りんごのほっぺ」というふうにより、一つの事柄を違った視点で授業するなど「いしぶみ」発展の可能性を感じる。

(イ)・(ウ)は、平和学習そのものを大きく変貌さ

せる可能性がある。すなわち、平和学習の単元構想である。「戦争の起こり」「加害・被害の責任」「他国への発信」「風化の問題」等、「いしぶみ」は各教科等との関連の中、大きな平和学習単元の一授業という位置づけになる。これもまた「いしぶみ」の進化・発展とってよいかもしれない。

談社

【付記】

本稿は、神部の『私家版 私の國語教室』（未公刊）に収録した実践記録を加筆修正したものです。

本実践記録の作成に当たって、東京未来大学教授所澤潤先生（2011年当時は群馬大学教授）に大変お世話になりました。ありがとうございました。また、この授業に参加し、感想をくださった生徒・学生・保護者・教員の皆様に心から感謝申し上げます。お陰様で、授業の精度を高めることができました。ありがとうございました。広島テレビ放送の山田圭子様には、授業で山田様の手紙を取り上げる許可を頂きました。心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

（注1）上越教育大学大学院教育実践高度化専攻のカリキュラムである「学校支援フィールドワーク」を指す。

（注2）中国新聞社 ヒロシマの記録-遺影は語る 広島二中

http://www.hiroshimapeacemedia.jp/abom/99abom/kiroku/2chu/2chutuika.html (2017.3.12確認)

【文献】

- (1) 広島テレビ放送編（1970）いしぶみ-広島二中学生全滅の記録- ポプラ社
- (2) 財団法人日本地図センター（2005）地図中心 2005号外 被爆60年増刊号
- (3) 渡辺美佐子（1987）ひとり旅一人芝居 p.17-23 講

（かんべ しゅういち）東京未来大学  
（なかさと しんいち）

群馬大学教育学部附属小学校

【資料 上毛新聞「視点」2016.8.6】

1) 上毛新聞 視点 (第三種郵便物承認)

**視点**

1997年に亡くなった女優、杉村春子さんが、被爆した広島二中一年生二人一人の死に至る経緯を静かに語る番組があった。69年、広島テレビ放送制作の「碑」という番組である。私はそれを10年ほど前にぐんま朗読塾の遠藤敦司先生から教えられた。数年たった2009年8月、偶然桐生の古書店で「いしぶみ-広島二中学生全滅の記録」（ポプラ社）を購入した。それをきっかけに私は「碑」の授業化ということを考えるようになった。

私はまず、広島テレビから「碑」のビデオを借りた。授業で、そのビデオを中学3年生に見せると、生徒は異口同音に「核兵器の恐ろしさ、平和の尊さ」について感想を述べた。「今、心の中にあるのは、ものすごく大きなショックだけです」と記した生徒もいた。「碑」が、第1級の平和教材であることを実感した。杉村さんのようにはいかないけれど、私自身が朗読で生徒に伝えたいと思った。「いしぶみ」には、家族によって明らかになった生徒一人一人の被爆後の様子が描かれている。50分の授業の中でどの生徒を紹介しようか。私は、本を何度も読んだ。広島時、同僚の中里真一先生（現群大附属小）が、「ヒロシマ

くに慰霊碑がある。その裏面に亡くなった生徒たちの名前が列挙されていた。私は、朝日俊明君、山名前を写真に撮った。後日、友人に頼んで西村正照君、洪

新聞を見つけました。日付は「1945年（昭和20年）8月7日（火曜日）」。『新型爆弾広島壊滅』都市の営みすべて消えた「打つ手なく医師無力感」と見出しが続く。しかし、原爆投下翌日に新聞が発行できるはずがない。これは、中国新聞労働組合が50年後の95年8月6日付で発行したものだ。「原爆投下の翌日、もし新聞が発行されていたらこんな新聞になっていたろう」という内容だった。授業の準備が整った。2010年夏、私はまず、ある生徒の日記を提示した。日記は8月4日で終わっている。その理由を発表させ、それから「いしぶみ」の朗読。生徒たちの感想発表の後、ヒロシマ新聞を見せて、原爆のイメージを具体化する。生徒たちは、50年後の発行に、原爆に対する風化防止という意味も見いだしていた。

ビデオを見せることから始めた授業は、毎年夏が来ると実施する朗読とNIEの授業となった。この夏、綾瀬はるかさんによる朗読劇映画「いしぶみ」が上映されている。中学校で私の授業を受けた卒業生が、その映画をどのように感じるのか。事実を知っているという事柄が感じ方を愛するに違いない。

東京未来大こども心理学部准教授  
かんべ しゅういち  
**神部 秀一** 太田市藤久良町

**見いだした風化防止**

【略歴】太田市生まれ。群馬大学大学院修了。37年間、公立小学校に勤務。2014年度から東京未来大で国語教育を担当。15年度より東京新聞NIEコーディネーター。

ホームページでも見られます。  
アドレスは <http://www.jomo-news.co.jp/>